

【論文要旨】

ジオパークとは都市部では見られない地質の露頭や地形・景観など「大地の遺産」を保全しつつ、観光や教育などに活用している地域のことであり、ジオツーリズムとは、ジオパークなどの「大地の遺産」を見学し、地球の歴史を学ぶというツーリズムの形態の一つである。特に福岡県の筑豊地域は、明治以降の西洋技術の導入により、戦前戦後の日本の近代化と工業化の過程において飛躍的な経済発展を導いたいわゆる「近代化(産業)遺産群」が見られる場所で、近代化を支えてきた資源である石炭にも直接触れられ、ここを訪れた人々が自然と人間との関わりを考えさせられる場所である。筑豊地域の「近代化(産業)遺産群」を大地の遺産と組み合わせることで訪ねることにより、生涯学習の立場からも新たな体験の場を提供することができ、これらの事象事物を組み合わせた新しいツーリズム形態の形成と地域の活性化が期待される。すでに、各地域では博物館・資料館などの設置が行われ、あるいは地学系自然ガイド本や近代化産業遺産ガイドでは、自然観察路や近代化遺産の見学コースなどが紹介されているが、自然と近代化の歴史を組み合わせる理解させる取り組みはいまだ十分とは言えない。過去の取り組みと成果を踏まえながら、本論文では特に地質と近代化遺産の素材を組み合わせるジオツーリズムを開発し、試験的なジオツアーを実施して、その可能性を分析した。アンケートの結果によると、このジオツアーは全体として興味関心を喚起した充実した内容であったと考えられる。機会があればこのようなジオツアーに再度参加したいという希望は94%の高率であり、この分野には一定の要望が存在することがうかがえた。

一方では筑豊地域については、近代化産業遺産などの地域資源の潜在的な価値を再評価し、忘れ去られた近代化産業遺産を地域資源として活用することだけでは、地域の活性化はかなり困難であると思われる。この困難を克服するためには、次にあげる課題を検討することが必要と考える。第一には、地域の地学的な自然や石炭産業関連の事象事物の現状を正確に記録することである。第二には、ジオツーリズムの理念が浸透するために、教育の中で郷土の自然と歴史を正しく学習させることである。第三には、ジオパークの認知や啓発普及、地質遺産のすばらしさを情報発信するために、資料館・博物館が中心となるべきであるということである。対象地域外からのジオツアーの参加者の拡大や炭鉱ファン作りを進めていくことが必要である。第四には、住民参加によりジオパーク作りと維持更新に努めていく必要がある。状況から当該地域での地元の支援体制作りは最後の課題となると思われる。最終的には住民が観光資源を自ら再発見する仕組みを作り出すことが大切ではないかと考える。第五には、企画の統合やジオサイトの整備についても連携を深め、縦割り行政を乗り越えて、ジオパークの総合情報案内サイトを立ち上げ、関連市町村の統一的な公式ホームページとリンクする必要があることがあげられる。

日本の多くの観光は、大きな観光資本や旅行社が主導権をもち、観光地側もそれらに頼ることで、結果として観光地の浮き沈みを握られていることがよくみられる。特に歴史的な観光は観光客の興味関心の低下が著しく、ブームの消滅が早く生じやすい。ジオツアーの見学コースを考えると、結局は持続可能性を高めた地域の発展に転じていくためには、住民自らが発信役を担い、その上で地域のまち作りに反映していく仕組みを作ることが必要である。また、必要な人材を育成する上で、地学・自然地理学的な知識も必要になるとと思われる。その糸口となり出発点になるものがジオパーク運動とジオツーリズムの開発であると考えている。地域がジオパークをめざしていくための具体的方策及びジオツーリズムの構成については、今後のさらなる調査と検証が必要になるとと思われる。